

# 今週の T2 経済レポート



2023年9月22日号

## ■■■ 市場ウオッチ ■■■

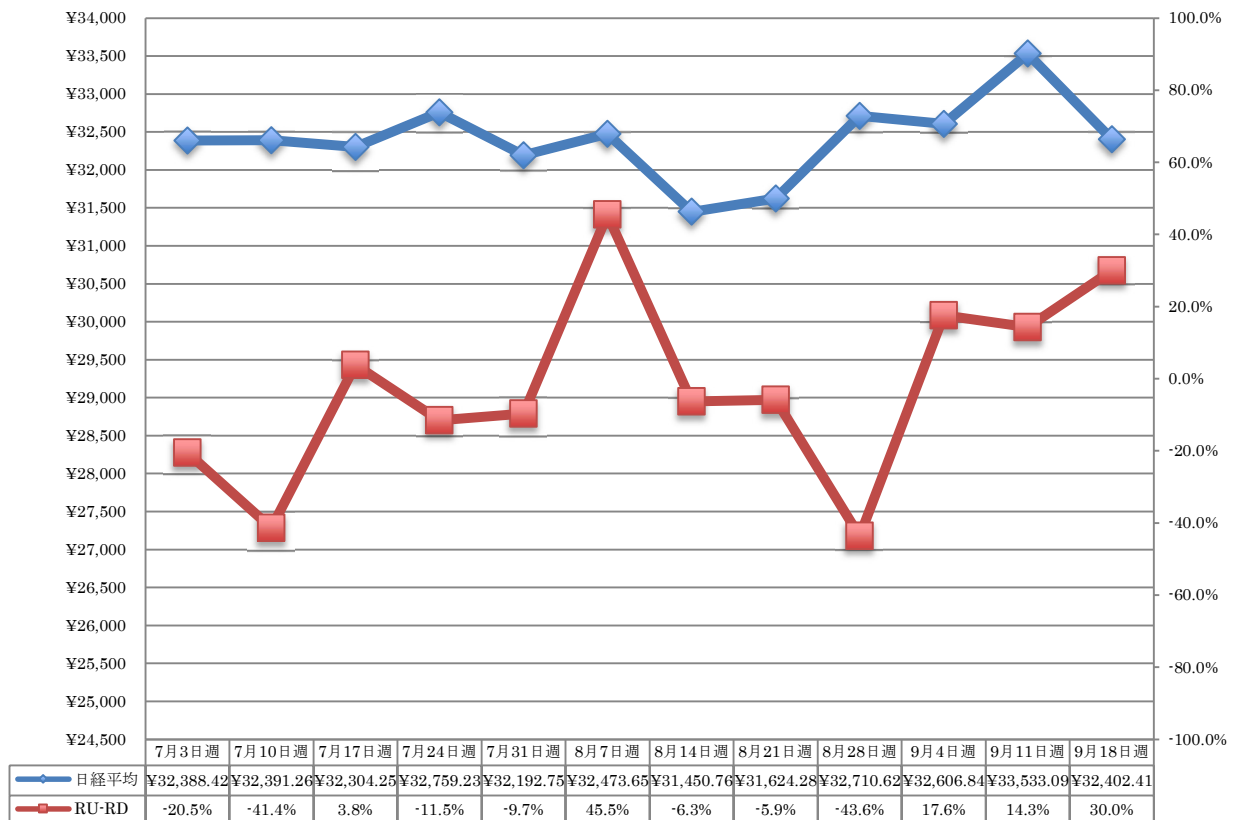
### <先週のマーケットを振り返る>

先週、「今週は本来ですと堅調相場の継続が予想される週となります。今週(9/18~9/22)の相場を占う『RU-RD 指標』の9月8日週が+30.0%と3週連続プラス圏に浮上したことから、本来ですと堅調相場の継続が予想されます。3週連続プラス圏は4月17日週~5月22日週の6週連続プラス圏以来。ただ、来週(9/25~9/29)の相場を占う9月15日週が-4.3%と4週間ぶりにマイナス圏に陥ったことから、本来ですと急落調整を警戒する週が予想されます。日本市場の8日のメジャーSQ や米国市場の15日のメジャーSQ が通過したことで、日米で行われてきた不自然な買い支えがどのように変化するかが注目されます。また、9月8日深夜(日本時間の9日午前7時すぎ)、これまで地震がほとんどなかったモロッコで不自然な大地震が起き、11日には北アフリカに位置するリビアで2つのダムが決壊して大洪水が起きた他、11日に「露朝が金正恩氏の訪露を公式発表」を報じました。以前から何度も指摘してきたように、21世紀の重要日「9.11」に起きたことは今後、長期間に亘り、影響を与えることからこれらが何を示唆するのか、また、毎年9月は「危険月」であることからまだまだ注意が必要な時間帯が続いています。先週、『先週7日、米労働省が発表した9月2日までの1週間の新規失業保険申請件数(季節調整済み)は21万6000件で、前週(改定値)の22万9000件から1万3000件減と4週間連続で減少、2月11日までの週以来の低水準で労働市場はなお引き締まった状態にあることが示される一方、8月29日発表された労働指標の先行指標である「非農業部門求人数」は7月882万件と、21年3月以来の低水準に減少し、22年3月1202万件のピークからは-27%減の水準、さらに、同じ労働指標の先行指標でもある「派遣社員数」も23年8月293.5万人と、21年9月以来の低水準に減少し、22年3月317.7万人のピークからは-7.6%減の水準に落ち込み、先行指標の労働指標と新規失業保険申請件数には大きな乖離が起きており、極めて不思議な労働指標になっています。過去、この「非農業部門求人数」はNYダウの先行指標でもあり、07年3月に同指標がピークを打った後、NYダウが07年10月をピークに「リーマン・ショック」、18年11月に同指標がピークを打った後、NYダウが19年12月をピークに「コロナ・ショック」、そして、今回は22年3月に同指標がピークを打った後、NYダ

ウが23年7月までリバウンドと不自然な上昇となっています。「非農業部門求人数」がピークを打った後、不自然な株価上昇を続けた07年、19年、23年は「大統領選挙の前の年」という共通点があり、かつ大統領選挙まで株価が持続できずに「〇〇ショック」が起きた点でも共通しています。』と指摘しましたが、先週発表された堅調な経済指標と何故、乖離しているかは注目すべきポイントです。一方、『日経平均とのほぼ一致指標である「買い(レーティング1と2)」「売り(レーティング3と4)」「銘柄比率」が8月4日週+45.7%→8月11日週+40.0%→8月18日週+10.0%→8月25日週+20.0%→9月1日週+28.6%→9月8日週+52.9%→9月15日週+47.1%と、「+40%超の上限ゾーン」を2週連続で上回り、また本来、天井圏・底値圏を示唆する同指標の「移動平均ベース」は8月4日週+39.8%→8月11日週+39.0%→8月18日週+34.3%→8月25日週+31.4%→9月1日週+31.4%→9月8日週+32.9%→9月15日週+33.1%と、21年3月22日週+44.3%以来となる「+40%超の上限ゾーン」を4週連続で突破後、7週連続で「+40%超の上限ゾーン」を割り込んでいますが、依然、高止まりしていることに変わりありません。以前から指摘していますが、今回のように天井圏を示唆する「+40%超の上限ゾーン」を21年3月に突破した後、底値圏を示唆する「-40%以下の下限ゾーン」が表れずに続けて天井圏を示唆する「+40%超の上限ゾーン」が表れたのは稀で、T2開始以来、16年12月12日週～17年1月16日週と17年10月30日週～11月27日週と18年1月1日週～1月29日週の一度だけです。その後、18年2月「VIXショック」に始まり、最終的には20年2月「コロナショック」へと発展しています。特に、今回が「異例中の異例」であるかは日経平均と連動していたTOPIXと新興市場のマザーズ市場の比率である「MT倍率」が、前回の連続「+40%超の上限ゾーン」が起きた16年5月9日週0.914倍と歴史的な高水準の時期に起きていたのに対し、今回は23年9月15日週0.305倍と、リーマン・ショック時08年10月13日週0.03倍以来の歴史的な低水準の時期に表れているためです。つまり、今回は「株価指数」だけが吊り上げられた不自然な株価上昇を示唆しています。前回以上の「〇〇ショック」がいつ起きるかが注目されます。

今週は、経済指標では、国内は、9月20日に8月貿易統計、8月訪日外国人客数、22日に8月全国消費者物価指数、海外では、18日に米国9月NAHB住宅市場指数、19日に米国8月住宅着工件数、20日に中国人民銀の9月最優遇貸出金利、21日に米国4-6月期経常収支、米国9月フィラデルフィア連銀製造業景気指数、米国8月コンファレンス・ボード景気先行指数、22日に米国9月製造業購買担当者景気指数(PMI)、米国9月サービス業PMIなどが予定されています。9月21日発表の9月フィラデルフィア連銀製造業景気指数は0と、前月の12.0から悪化が見込まれています。このほかのイベント・トピックスとしては、国内では、21日に日銀金融政策決定会合(-22日)、植田日銀総裁記者会見、海外では、9月19-20日にFOMCを開催、パウエルFRB議長記者会見、21日にイングランド銀行(BOE)政策金利、などが予定されています。」とコメントしました。

RU-RD指標と日経平均（週末終値）



8月28日週	9月4日週	9月11日週	9月18日週
¥32,710.62	¥32,606.84	¥33,533.09	¥32,402.41
-43.6%	17.6%	14.3%	30.0%

先週の日経平均は、高値 33337 円(9 月 19 日)・安値 32154 円(9 月 22 日)と推移、前の週と異なり、前半高・後半安の弱いかたち。先週は、月曜日が敬老の日の祝日で休場だったため 3 連休明けの週初は前週末の米国株市場で半導体関連を中心にハイテク株が売られた流れを引き継ぐかたちで売り優勢でスタート、9 月 19-20 日に開かれた注目の FOMC では事前の予想通り追加利上げは見送られましたが、パウエル米連邦準備制度理事会(FRB)議長の記者会見が想定以上にタカ派だったことを受けて米 10 年債利回りが 16 年ぶりの高水準を記録、また、22 日の昼頃に政策の現状維持を決定した日銀金融政策決定会合でしたが東京市場でも国内長期金利の上昇がグロース株に逆風となり 4 日続落で下値目標値を下回り、週間ベースでは-1131 円安と、8 月 14 日週-1023 円以来の 1000 円超の下落で終了しています(先週予告していた上値メド 33745 円~34419 円(+2%かい離)//下値メド 32839 円~32182 円(-2%かい離))。日経平均の『大台替えと時間の物理学的法則』では、小刻みの大台替えで、時間切れとなっていました、9 月 22 日に 32500 円大台割れで下落スタートとなりました。32000 円大台割れでカウントダウンの下落局面、逆に、33000

円大台替えて仕切り直しが入ります。中期の方向を示す月ベースでは、逆に9月5日に33000円大台替えて仕切り直しが入りました。34000円大台替えてカウントダウンの上昇局面、逆に、32000円大台割れで下落スタートとなります。また長期の方向を示す月ベースの大台替えの法則では、逆に9月に33000円大台替えて仕切り直しが入りました。34000円大台替えてカウントダウンの上昇局面、逆に、32000円大台割れで下落スタートとなります。これで短期↓、中期↑、長期↑となり、中期・長期の強含みに変わりませんが、短期が弱含みと逆方向になったことで、目先は下落しやすいながらも乱高下しやすいかたちに変化しました。不自然な8日続伸で9月5日には33000円を強引に越えさせましたが、それは8月末株価と9月8日のメジャーSQを意識した「株価操縦」の実態を示したかたちです。また、14日の急上昇も11月解散総選挙のための「選挙相場」の演出とも思われ、浅はかな現政権の実態を象徴したかたちですが、思惑通りに進むかは甚だ疑問です。中期・長期が弱含みに変化する「32000円」大台割れが起きるかに注目です。

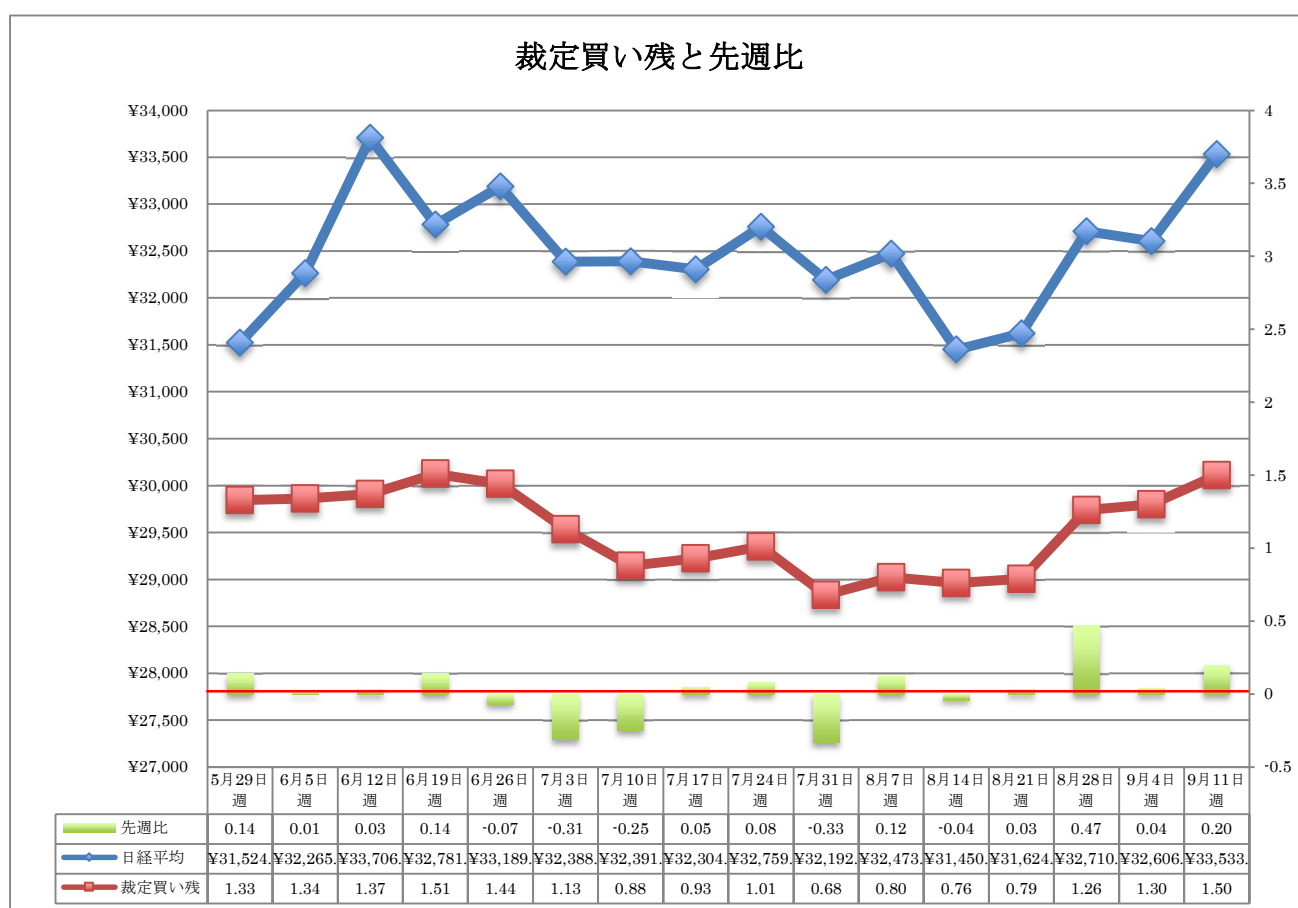
日経平均を左右するNYダウは、高値34776ドル(9月20日)・安値33947ドル(9月22日)と推移、前の週と異なり、前半高・後半安の弱いかたち。先週は、9月19-20日に開かれた米連邦公開市場委員会(FOMC)で政策金利の据え置きが予想通り決定されましたが、米連邦準備理事会(FRB)による高金利政策の長期化見通しを受けて米10年債利回りが16年ぶりの高水準を記録、金利に敏感な大型株が下落したことに加え、政府機関閉鎖の可能性などが意識され、主要3指数はそろって4日続落下値目標値を達成、週間ベースでは-655ドル安とここ4週間は毎週上下を繰り返しているものの、前の週末15日の株価指数先物・オプションのメジャーSQを意識した株価吊り上げの反動が表れダウ平均は2カ月半ぶりの安値、S&P500とナスダック総合も3カ月半ぶりの安値で終了しています(先週予告していた上値メド34959ドル~35658ドル(+2%かい離)//下値メド34355ドル~33667ドル(-2%かい離))。NYダウの『大台替えと時間の物理学的法則』では、短期の大台替えて、逆に、9月6日に34500ドル大台割れで下落スタート、22日に34000ドル大台割れでカウントダウンの下落局面入りに16日間、従って、10月8日までに33500ドル大台割れでカウントダウン継続を狙う時間帯に入りました。逆に、34500ドル大台替えて仕切り直しが入ります。中期の方向を示す月ベースでは、逆に、6月12日に34000ドル大台替えて仕切り直しが入り、7月19日に35000ドル大台替えてカウントダウンの上昇局面入りに約1ヶ月、従って、8月26日(土曜日のため猶予で週明け28日)までに36000ドル大台替えてカウントダウン継続を狙う時間帯に入りましたが実現せず時間切れ。36000ドル大台替えて仕切り直し、逆に、33000ドル大台割れで下落スタートとなります。また長期の方向を示す月ベースでは、逆に、6月に34000ドル大台替えて仕切り直しが入り、7月に35000ドル大台替えてカウントダウンの上昇局面入りに1ヶ月、従って、8月までに36000ドル大台替えてカウントダウン継続を狙う時間帯に入りましたが、実現せず時間切れ。36000ドル大台替えて仕切り直し、逆に、33000ドル大台割れで下落スタートとなります。これで短期↓、中期→、長期→と、中期・長期がともに時間切れで方向感なしは変わりませんが、短期が弱含み、かつカウントダウンが始まり、目先は下落しやすいながらも全体は方向感がないことから

乱高下しやすいかたちは変わりません。中期・長期が弱含みに変化する「33000 ドル」大台割れが起きるかに注目です。尚、日本株とより流動性の高いNASDAQ 指数の「大台替えの法則」は、短期の大台替えで、9月20日に逆に、13500大台割れで下落スタートとなりました。13000大台割れでカウントダウンの下落局面、逆に、14000大台替えで仕切り直しが入ります。中期の方向を示す月ベースでは、5月26日に13000大台替えで仕切り直しが入り、7月13日に14000大台替えでカウントダウンの上昇局面入りに約2ヶ月弱、従って、8月31日までに15000大台替えでカウントダウン継続を狙う時間帯でしたが、実現せず時間切れ。16000大台替えで仕切り直し、逆に、13000大台割れで下落スタートとなります。また長期の方向を示す月ベースでは、5月に13000大台替えで仕切り直しが入り、7月に14000大台替えでカウントダウンの上昇局面入りに2ヶ月、従って、9月までに15000大台替えでカウントダウン継続を狙う時間帯に入りました。逆に、13000大台割れで下落スタートとなります。これで短期↓、中期→、長期↑と、長期の強含みは変わりませんが、中期の方向感がなくなり、長期も時間切れとなる可能性が強まったかたちです。また、短期が強含みから弱含みに変化したことで目先は下落しやすいかたちに変化しましたが、中期・長期の方向性が異なることから乱高下しやすいことは変わりません。ポイントは中期・長期が弱含みに変化する「13000」大台割れです。

一方、為替は、ドル・円が148.45円～147.31円(先週予告していた上値メド148.66円～150.14円(+1%かい離)//下値メド146.25円～144.78円(-1%かい離))と推移し、上値・下値両目標値を達成しない週が2週連続で続きましたが、実質は3週連続の円安・ドル高、ドル・ユーロは、1.0736～1.0613(先週予告していた上値メド1.0717～1.0824(+1%かい離)//下値メド1.0567～1.0461(-1%かい離))と推移し、上値目標値を達成し、3週間振りにドル安・ユーロ高。また、ユーロ円は、158.47円～156.94円(先週予告していた上値メド158.35円～159.93円(+1%かい離)//下値メド156.20円～154.63円(-1%かい離))と推移し、上値目標値を達成し、実質6週間振りに円安・ユーロ高。前の週のドル>円>ユーロからユーロ>ドル>円に3週間ぶりに変化しました。9月19-20日に開かれた米連邦公開市場委員会(FOMC)の会合で政策金利の据え置きが予想通り決定されましたが、将来的な追加利上げの可能性が残された一方、欧州中央銀行(ECB)による利上げサイクルの終了観測が広がり、ユーロ売り・米ドル買いが一時優勢となったものの、ユーロ圏のインフレ持続を警戒して早期利下げ観測が後退、週後半はユーロ・ドルが1.06ドル台半ば近辺で推移し、下げ渋ったかたちです。また、日本銀行は現行の金融緩和策を長期間維持するとの見方が強まり、日欧金利差縮小の思惑が後退したことからユーロ売り・円買いは週末前に縮小したかたちです。

## <裁定買い残・裁定売り残>

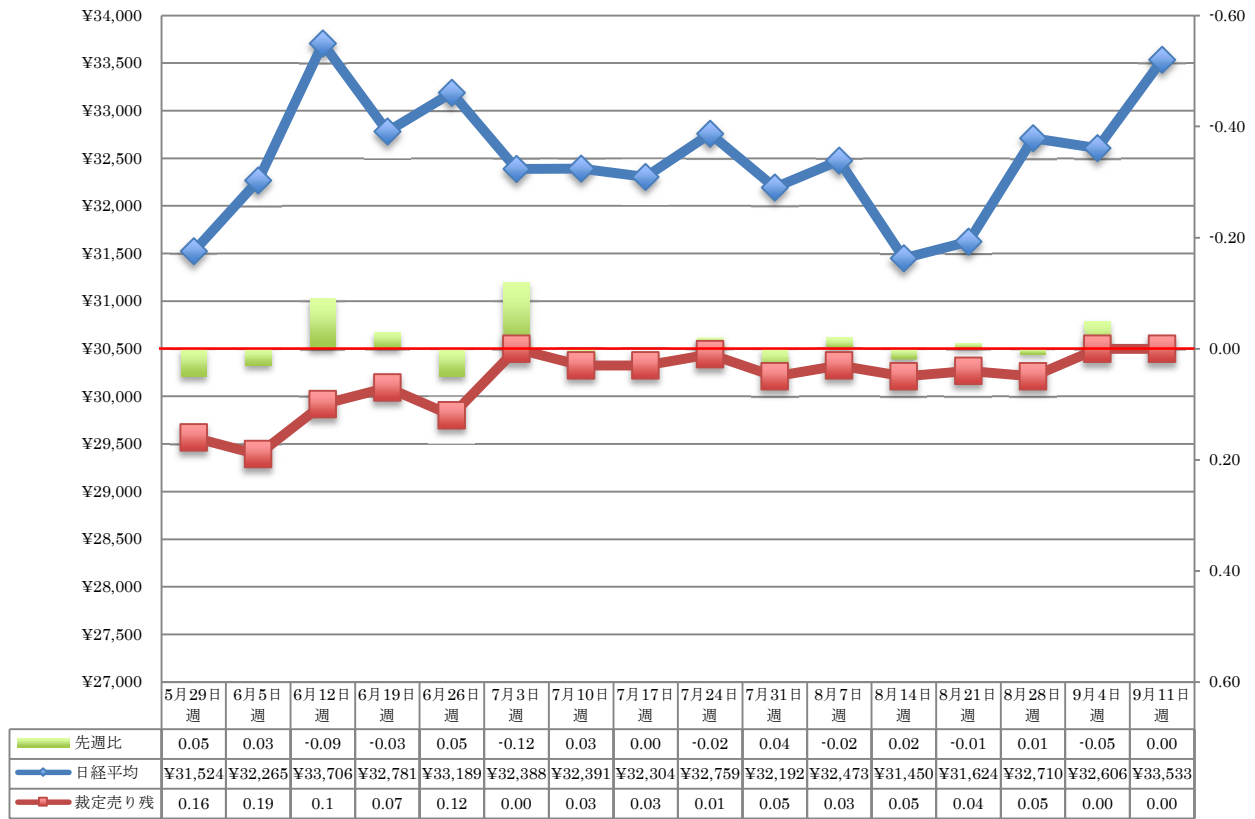
4週連続増加、8月28日週4668億円と3月6日週以来の4000億円超の増加を含め、4週間で7464億円の急増となっており、9月8日のメジャーSQのための株価吊り上げが行われたことを示しています。また、1兆5000億円台は18年10月8日週以来の高水準ですが、2021年以降、2000億円台～1兆4000億円のレンジで動いてきていてその上限を突破しましたが、今後、2兆円台に向かうのか、それとも若干レンジ上限を越えたものの「メジャーSQ」ため減少するのか、が注目されましたが、今週の日米の株価急落をみると後者の可能性が高そうです。一方、「裁定売り残」は、前の週比-39億円の0億円と、2週連続で減少。0円はアベノミクス初期の13年3月4日週以来で、10年振りに起きたこの象徴的な「0」は何か大きな変化を示唆しています。



8月21日週	8月28日週	9月4日週	9月11日週
¥31,624.28	¥32,710.62	¥32,606.84	¥33,533.09
0.79	1.26	1.3	1.50
0.03	0.47	0.04	0.20

単位:兆円

### 裁定売り残と先週比



8月21日週	8月28日週	9月4日週	9月11日週
¥31,624.28	¥32,710.62	¥32,606.84	¥33,533.09
0.04	0.05	0.00	0.00
-0.01	0.01	-0.05	0.00

単位:兆円

## <今週のマーケットの見通し>

今週は本来ですと急落調整を警戒する週が予想されます。今週(9/25~9/29)の相場を占う『RU-RD 指標』の9月15日週が-4.3%と4週間ぶりにマイナス圏に陥ったことから、本来ですと急落調整を警戒する週が予想されます。さらに、来週(10/2~10/6)の相場を占う9月22日週が-55.8%と2週連続マイナス圏、かつ8月14日週-43.6%以来となる「-40%超の下限ゾーン」に陥っていることから、本来ですと軟調相場の週が予想されます。先週、『日本市場の8日のメジャーSQや米国市場の15日のメジャーSQが通過したことで、日米で行われてきた不自然な買い支えがどのように変化するかが注目されます。』と指摘しましたが、日経平均は8月14日週-1023円以来となる1000円超の下落、NYダウも2カ月半ぶりの安値まで下落しました。ブルームバーグニュースでは、世界の株式ファンドから9月20日週169億ドル(約2.5兆円)と、週間ベースで今年最大の資金流出が起きたことを報じていますが、何度も指摘してきたように、今年23年は07年や19年と「大統領選挙の前の年」で共通しており、いずれも今年のような不自然な株価上昇を続けた後、「リーマン・ショック」や「コロナショック」に発展したことからその兆候が表れたかもしれません。T-Model分析「大台替えの法則」では日経平均が「32000円」大台割れ、NYダウが「33000ドル」大台割れで中期・長期が弱含みに変化することから先ずは注目です。尚、日本株とより連動性の高いNASDAQ指数は「13000」大台割れで中期・長期が弱含みに変化します。また、9月8日深夜(日本時間の9日午前7時すぎ)、これまで地震がほとんどなかったモロッコで不自然な大地震が起き、11日には北アフリカに位置するリビアで2つのダムが決壊して大洪水、11日に「露朝が金正恩氏の訪露を公式発表」を報じられましたが、以前から何度も指摘してきたように、21世紀の重要日「9.11」に起きたことは今後、長期間に亘り、影響を与えることからこれらが何を示唆するのか。また、毎年9月は「危険月」であることから今週末までまだまだ注意が必要な時間帯が続くこととなります。一方、『日経平均とのほぼ一致指標である「買い(レーティング1と2)」「売り(レーティング3と4)」「銘柄比率」が8月4日週+45.7%→8月11日週+40.0%→8月18日週+10.0%→8月25日週+20.0%→9月1日週+28.6%→9月8日週+52.9%→9月15日週+47.1%→9月22日週+27.1%と、「+40%超の上限ゾーン」を3週間振りに割り込み、また本来、天井圏・底値圏を示唆する同指標の「移動平均ベース」は8月4日週+39.8%→8月11日週+39.0%→8月18日週+34.3%→8月25日週+31.4%→9月1日週+31.4%→9月8日週+32.9%→9月15日週+33.1%→9月22日週+31.0%と、21年3月22日週+44.3%以来となる「+40%超の上限ゾーン」を4週連続で突破後、8週連続で「+40%超の上限ゾーン」を割り込んでいますが、依然、高止まりしていることに変わりありません。以前から指摘していますが、今回のように天井圏を示唆する「+40%超の上限ゾーン」を21年3月に突破した後、底値圏を示唆する「-40%以下の下限ゾーン」が表れずに続けて天井圏を示唆する「+40%超の上限ゾーン」が表れたのは稀で、T2開始以来、16年12月12日週~17年1月16日週と17年10月30日週~11月27日週と18年1月1日週~1月29日週の一度だけです。その後、18年2月「VIXショック」に始まり、最終的には20年2月「コロナシ



ック」へと発展しています。特に、今回が「異例中の異例」であるかは日経平均と連動していた TOPIX と新興市場のマザーズ市場の「MT 倍率(TOPIX/マザーズ)」が、前回の連続「+40%超の上限ゾーン」が起きた 16 年 5 月 9 日週 0.914 倍と歴史的な高水準の時期に起きていたのに対し、今回は 23 年 9 月 15 日週 0.305 倍と、リーマン・ショック時 08 年 10 月 13 日週 0.03 倍以来の歴史的な低水準の時期に表れているためです。つまり、今回は「株価指数」だけが吊り上げられた不自然な株価上昇を示唆したかたちで、前回以上の「〇〇ショック」がいつ起きるかが注目されます。

今週は、経済指標では、国内は、9 月 25 日に日 8 月全国百貨店売上高、27 日に日銀金融政策決定会合議事要旨(7 月 27-28 日開催)、8 月工作機械受注、29 日は 9 月都区部消費者物価指数、8 月失業率・有効求人倍率、8 月鉱工業生産、海外では、25 日に独 9 月 IFO 企業景況感指数、26 日に米 7 月 S&P/コアロジック CS20 都市住宅価格指数、米 8 月新築住宅販売件数、米 9 月消費者信頼感指数、27 日に米 8 月耐久財受注、28 日に独 9 月消費者物価指数、米 4-6 月期 GDP 確定値、29 日に中 9 月財新製造業 PMI、中 9 月財新サービス業 PMI、欧 9 月ユーロ圏消費者物価コア指数、米 8 月個人消費支出(PCE)コアデフレーター、30 日に中 9 月製造業 PMI、中 9 月非製造業 PMI、が予定されています。29 日発表の米 8 月コア PCE 価格指数は前年比+3.9%と、前回の+4.2%から伸びが鈍化する見通しです。このほかのイベント・トピックスとしては、国内では、25 日に植田日銀総裁が講演、同記者会見、海外は、28 日に米・シカゴ連銀総裁が講演、米・リッチモンド連銀総裁が講演、29 日に米・ニューヨーク連銀総裁が講演、中・株式市場は祝日のため休場(中秋節、国慶節)、10 月 9 日に取引再開、などが予定されています。

RU-RD指標と日経平均（週末終値）



9月11日週	9月18日週	9月25日週	10月2日週
¥33,533.09	¥32,402.41		
14.30%	30.00%	-4.30%	-55.80%

## ■■■ 今週の各指標の上値・下値メモ ■■■

### <日経平均>

上値メモ 33301 円～33967 円 (+2%かい離)

下値メモ 32282 円～31636 円 (-2%かい離)

### <NY ダウ>

上値メモ 34705 ドル～35399 ドル (+2%かい離)

下値メモ 34183 ドル～33499 ドル (-2%かい離)

### <ドル円>

上値メモ 148.87 円～150.35 円 (+1%かい離)

下値メモ 146.89 円～145.42 円 (-1%かい離)

### <ドルユーロ>

上値メモ 1.0718～1.0825 (+1%かい離)

下値メモ 1.0585～1.0479 (-1%かい離)

### <ユーロ円>

上値メモ 158.55 円～160.13 円 (+1%かい離)

下値メモ 156.72 円～155.15 円 (-1%かい離)

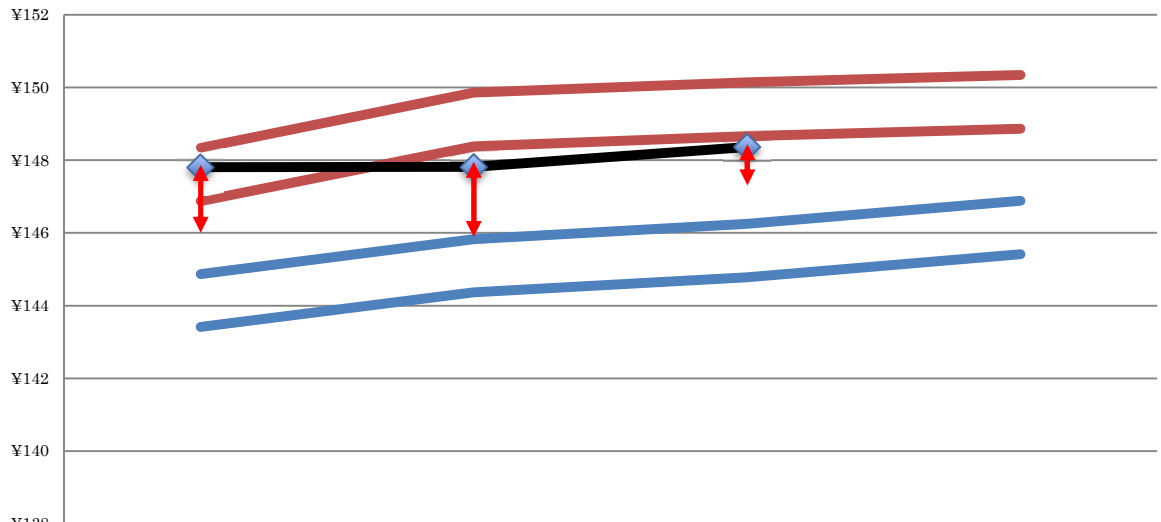
### 日経平均



### NYダウ

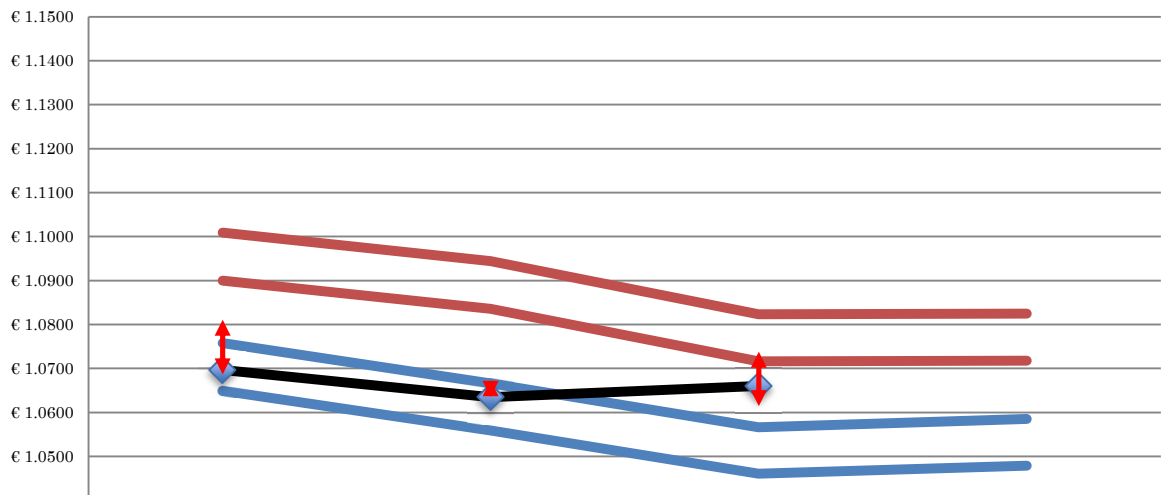


### ドル円

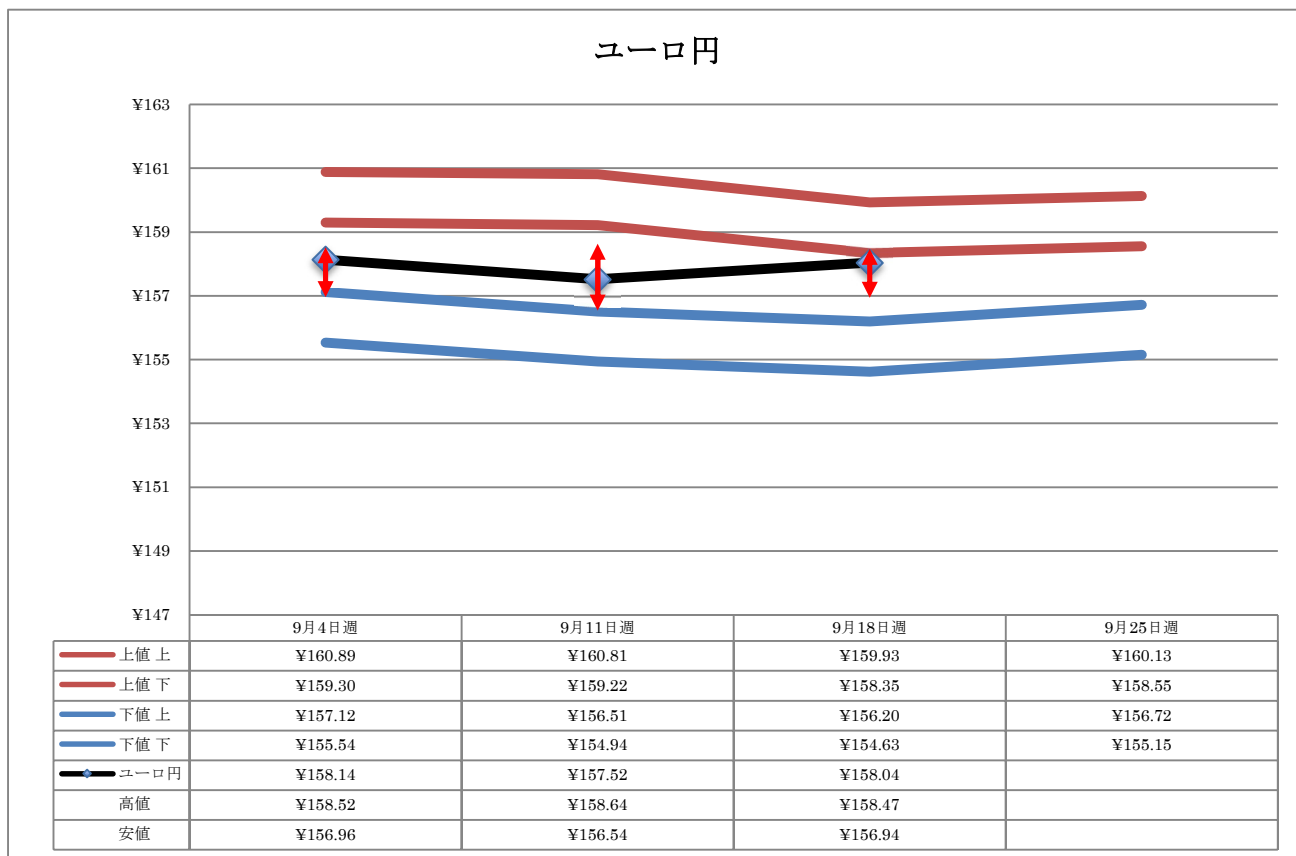


	9月4日週	9月11日週	9月18日週	9月25日週
上値上	¥148.34	¥149.86	¥150.14	¥150.35
上値下	¥146.88	¥148.38	¥148.66	¥148.87
下値上	¥144.87	¥145.83	¥146.25	¥146.89
下値下	¥143.42	¥144.37	¥144.78	¥145.42
ドル円	¥147.81	¥147.82	¥148.37	
高値	¥147.87	¥147.96	¥148.45	
安値	¥146.00	¥145.89	¥147.31	

### ドルユーロ



	9月4日週	9月11日週	9月18日週	9月25日週
上値上	€ 1.1009	€ 1.0944	€ 1.0824	€ 1.0825
上値下	€ 1.0900	€ 1.0836	€ 1.0717	€ 1.0718
下値上	€ 1.0758	€ 1.0666	€ 1.0567	€ 1.0585
下値下	€ 1.0650	€ 1.0559	€ 1.0461	€ 1.0479
ドルユーロ	€ 1.0697	€ 1.0635	€ 1.0660	
高値	€ 1.0812	€ 1.0674	€ 1.0739	
安値	€ 1.0686	€ 1.0661	€ 1.0615	

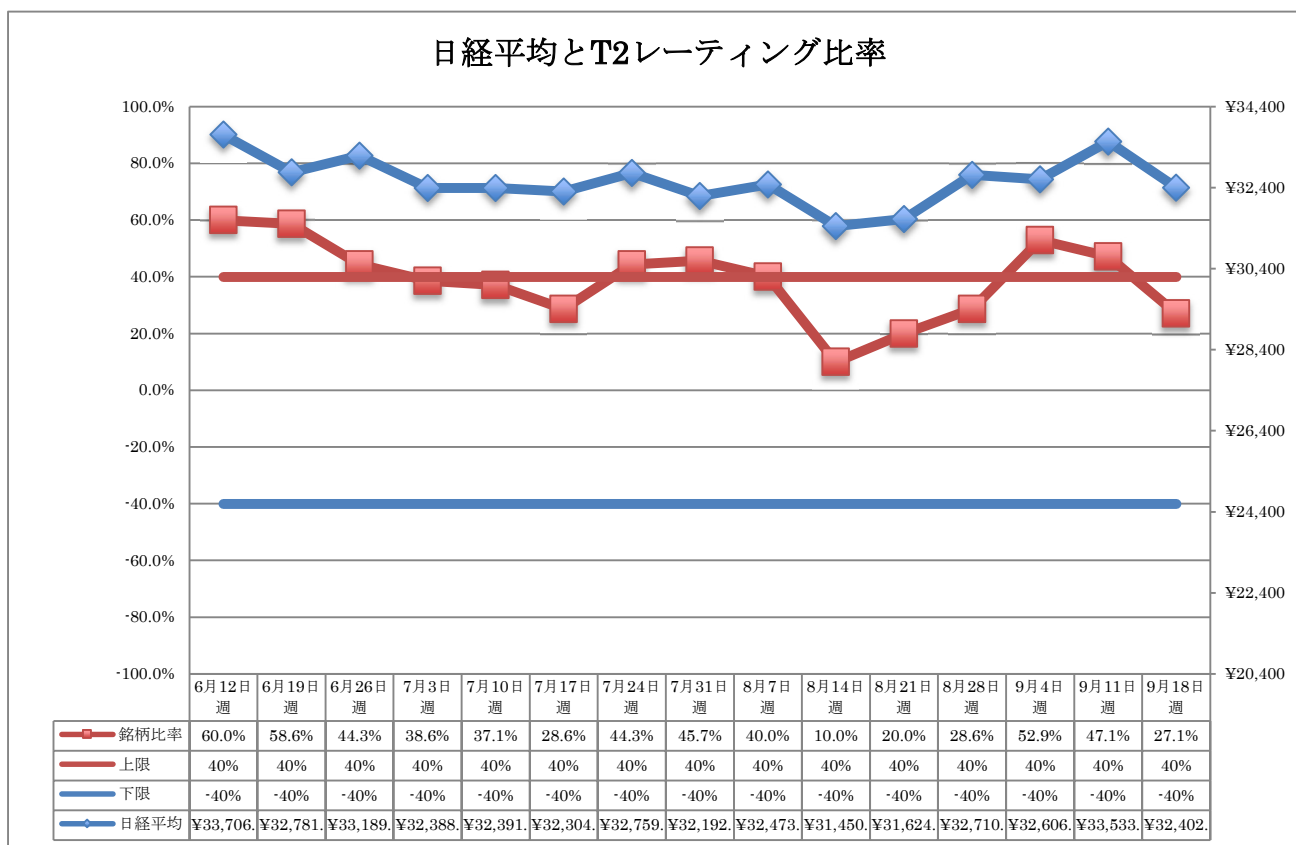


## ■■■ レーティング変更 ■■■

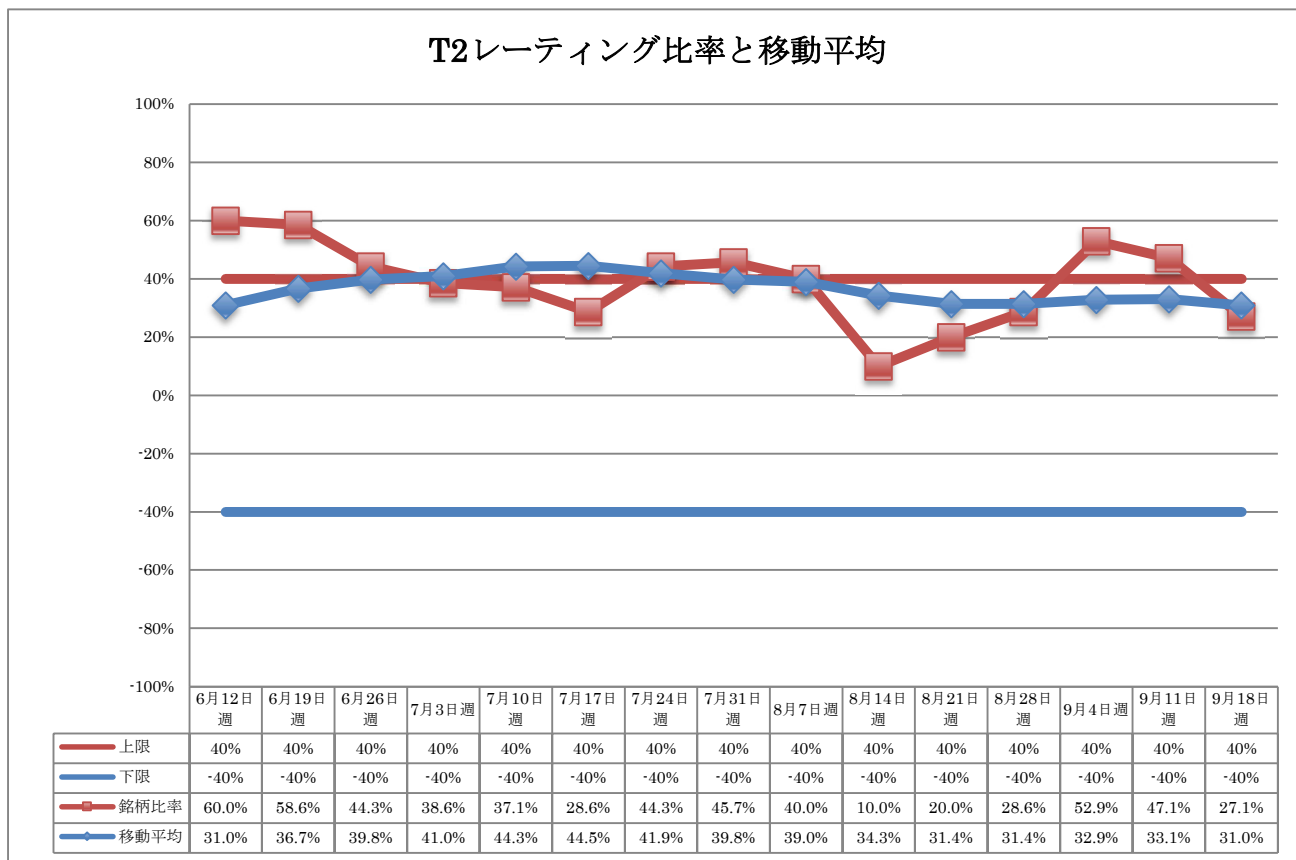
同指標は日経平均に多少先行しますが一致指標。同指標は、23年7月7日週+38.6%→7月14日週+37.1%→7月21日週+28.6%→7月28日週+44.3%→8月4日週+45.7%→8月11日週+40.0%→8月18日週+10.0%→8月25日週+20.0%→9月1日週+28.6%→9月8日週+52.9%→9月15日週+47.1%→9月22日週+27.1%と、「+40%超の上限ゾーン」を3週間振りに割り込み、また本来、天井圏・底値圏を示唆する同指標の「移動平均ベース」は8月4日週+39.8%→8月11日週+39.0%→8月18日週+34.3%→8月25日週+31.4%→9月1日週+31.4%→9月8日週+32.9%→9月15日週+33.1%→9月22日週+31.0%と、21年3月22日週+44.3%以来となる「+40%超の上限ゾーン」を4週連続で突破後、8週連続で「+40%超の上限ゾーン」を割り込んでいますが、依然、高止まりしていることに変わりありません。以前から指摘していますが、今回のように天井圏を示唆する「+40%超の上限ゾーン」を21年3月に突破した後、底値圏を示唆する「-40%以下の下限ゾーン」が表れずに続けて天井圏を示唆する「+40%超の上限ゾーン」が表れたのは稀で、T2開始以来、16年12月12日週～17年1月16日週と17年10月30日週～11月27日週と18年1月1日週～1月29日週の一度だけです。その後、18年2月「VIXショック」に始まり、最終的には20年2月「コロナショック」へと発展しています。特に、今回が「異例中の異例」であ

るかは日経平均と連動していた TOPIX と新興市場のマザーズ市場の「MT 倍率(TOPIX/マザーズ)」が、前回の連続「+40%超の上限ゾーン」が起きた 16 年 5 月 9 日週 0.914 倍と歴史的な高水準の時期に起きていたのに対し、今回は 23 年 9 月 15 日週 0.305 倍と、リーマン・ショック時 08 年 10 月 13 日週 0.03 倍以来の歴史的な低水準の時期に表れているためです。つまり、今回は「株価指数」だけが吊り上げられた不自然な株価上昇を示唆したかたちで、前回以上の「〇〇ショック」がいつ起きるかが注目されます。

※以下の T2 レーティング比率で目先の天井(40%超)、底(-40%超)を予測



※以下の T2 レーティングの「移動平均」で中長期的な天井(40%超)、底(-40%超)を予測



□発行元:塚澤.com 運営事務局

□ご意見・ご感想:info@tsukazawa.com

※免責事項※

「塚澤.com 今週の T2経済レポート」は、

株式会社ライブグラフィー(以下、当社)が提供するレポートです。

これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社は一切責任を負いかねます。

提供する全ての情報について、当社の許可なく転用・販売することを禁じます。